

植物の重複標本という考え方

2010年5月、スコットランドのエジンバラ植物園で開催されるヒマラヤ植物研究会に参加するのに合わせ、標本調査のためイギリスのキュー植物園を訪れました。キュー植物園の標本庫は400万点という膨大な植物標本を収蔵しています。ここでは、キュー植物園で発見(400万点の標本の中から偶然みつけたので“発見”としました)した古瀬義氏が採集した植物標本を例に重複標本という考え方について紹介します。

古瀬コレクション

古瀬氏が採集した植物標本コレクション(以下古瀬コレクションと表記)については、本誌3巻4号、15巻4号などに紹介されていますが、古瀬氏はキュー植物園だけでなく、スウェーデンのウプサラ大学の標本庫やアメリカのナショナルハーバリウム(スミソニアン博物館の植物標本庫)、中国の中国科学院植物研究所などに寄贈されています。今回、キュー植物園で発見したのはその中の1点である1964年10月18日に千葉県三石山で採集されたシラスゲの標本で、古瀬氏の標本番号は42707でした。

植物標本における重複標本

帰国後、当館の収蔵標本を調べてみると、古瀬氏の標本番号42707のシラスゲが、当館にも収蔵されていました。植物では、同一の木の枝から採集した木本植物の標本や同所的に生育して

いるのを採集した草本植物の標本は、重複標本として、慣例的に同一の標本として扱われます。ここで紹介した古瀬氏が同一の標本番号(42707)をつけたシラスゲの標本は、重複標本として同一のものとして扱われるのです。

このような事情のため、海外の学術調査やさまざまな調査においては、可能な限り多くの標本を採集し、その重複標本を各地の標本庫に寄贈します。その結果、同一の標本について、それぞれの標本庫で調査することが可能になり、有効に活用されることになるのです。インターネット上に公開されているデータを調べると、古瀬コレクションでは、1973年4月16日に西表島で採集されたヤブレガサウラボシ(古瀬氏の標本番号2924)は先のシラスゲ同様にキュー植物園と当館(図1)に収蔵されていますし、1954年6月22日に山梨県で採集されたハシドイ(古瀬氏の標本番号1050)はスミソニアン博物館とウプサラ大学に収蔵されています。

ホロタイプと重複標本、アイソタイプ

植物では、このような重複標本の考え方が一般的なこともあり、植物命名規約には、新種記載時に指定されたホロタイプ(holotype; 正基準標本)の重複標本に対して、アイソタイプ(isotype; 副基準標本)という規定があります。標本に優劣をつけるのは適切ではないかもしれませんが、通常、重複標本より、ホロタイプと重複標本であるアイソタイプ

とされる標本は、より分類学的に重要な位置づけになります。

実は、アイソタイプに相当する標本も当館に収蔵されていました。

Robsonが記載したフルセオトギリ *Hypericum furusei* は、1976年8月11日に北海道士別市で採集された標本(古瀬11518)を、ヌポロオトギリ *Hypericum nuporoense* は1976年8月10日に北海道幌延町で採集された標本(古瀬11544)をそれぞれホロタイプとして記載されました(Robson, 2004, 2006)。これらの重複標本(アイソタイプに相当する)がそれぞれ図2と図3です。当館では、前者はマシケオトギリ *H. yamamotoi* として、後者はイワオトギリ *H. kamtschaticum* var. *kamtschaticum* として収蔵されているものでした。

そして、Robson(2006)によると、これら2つの新種の植物の標本は、タイプ標本しか知られておらず、今後、当館の重複標本も含め、再検討が必要になる可能性もあります。

このオトギリソウの例では、古瀬氏がキュー植物園に標本を寄贈したことにより2新種が記載されました。そして、重複標本が当館に所蔵されていることにより、その検証を日本でもできるという象徴的な事例で、重複標本を作成し、それをさまざまな標本庫が所蔵することの重要性を示唆してくれます。

※本研究には平成23年度科学研究費助成事業(課題番号23501233)の一部を使用した。



図1 ヤブレガサウラボシ(西表島1973.4.16 古瀬義2924 KPM-NA0067210)。



図2 フルセオトギリ(マシケオトギリ 北海道士別市1976.8.11 古瀬義11518 KPM-NA0076727)。



図3 スポロオトギリ(イワオトギリ 北海道幌延町1976.8.10 古瀬義11544 KPM-NA0075154)。